

小児科だより vol.72

～ 学習障害(限局性学習症)パート1 ～

2022.9.1 発行

こんにちは。まだ残暑は厳しいですが、ようやく朝晩は、一息つけるようになってきました。先月に続き、小児科外来では、ヒトメタニューモウイルス感染症やパラインフルエンザウイルス感染症など、特異的な症状を持つ患者さんが多く受診されています。犬が吠えるような、とも形容される、特徴的な咳（主に息を吸ったときに、空気の通り道が狭くなってケンケンというような咳）はクループ症候群とも呼ばれる状態です。また、咳や鼻水が長く続き、咳込み



嘔吐おうとや喘鳴ぜんめい（ゼイゼイ、ヒューヒュー）を伴うことがあるので、症状のある方は早めの受診をお勧めします。発熱や咳などの症状が強く出ることもありますが、多くは自然軽快する風邪の一種です。皆様がいま、特に注意して行っている感染症対策に加えて、症状のある時は、早めにしっかり療養することで対応しましょう。

さて、今月の小児科だよりは、発達障がいの一つとして捉えられる、『限局性学習症』についてです。言葉の定義に関して、詳細を書こうとするとそれだけで終わってしまうので、細かい定義に関しては割愛させていただきます。また、発達障がいに関しては、過去に4回ほど（『場面緘黙』の項目も含めて）書いておりますので、気になる方は、過去の小児科だよりもご参照ください。

全般的な知的能力は正常範囲にあり、聴覚や視覚などの感覚障害がないとしても、書字、読字、計算など一部に極端な苦手さを持つことで学習上の様々な困難さを示す総称です。知的な能力のうち、具体的に、聞く、話す、読む、書く、空間認知、時間認知、計算と分けた場合、一部のみが極端に低く個人内差が大きい状況といえます。

限局性学習症のひとつで、書字読字が苦手で文字がなかなか習得できない、発達性読み書き障害の方は、日本語話者で、約8%いるという報告があります。二次的な問題として、成功体験が得られにくく自信が持てないため、結果として消極的になり、文章を読みたがらないことから、語彙や知識の拡大が制限されることが知られています。

繰り返しますが、知的な問題や学習意欲がないことで生じるものではないので、その子にあった適切な指導法を用いる必要があります。具体的な支援は、大きくふたつに大別され、苦手な部分を補う訓練を通級指導教室など個別指導の場で行い、苦手なところを迂回して学習を進める支援を通常学級内での指導として行うこととなります。紙面の都合上、詳細については、別の機会にパート2としてお話ししたいと思います。